NASON
HQ
1.L.6
2974

Sept. 1891
no. 399

明治十八年初刊

女學雜誌

每週土曜日發兌

第三百九十九號

要目

開書凡そ七通

寄せらろる所ろの人は、云く樺山中將。云く、山路中將。云く、朴泳孝。云く、大鳥公使。云く、伊藤伯。云く、後藤伯。云く、井上角五郎氏。

時勢觀

云く。夢幻の人。云く、惜しまるろの今。云く、發見の道。三篇即はちこれ今回の社說。些さか、時勢に觀じて、現實直接の透察に警告せんとす。

少年教育

一に題して日曜學校教任者の心得と云ふ。即はち、第二回女子夏季學校に集まりたろ當路者の懇談を概括筆記したろものとす。總べて是れ多年經驗の說、語短かくして意義、頗ぶろ長し。

僞善者を解す

外美內醜の僞德は、何に由りて惡むべきや。哲學審美學上、精細なろ觀察を下して、明哲也。

熊澤蕃山

蕃山氏の傳紀、いよ〱佳境に入ろ。逸事の面白きもの一二。名聲赫々たりし趣き。閑居の姿及び佛徒に對するの意見、すべて此回に備はろ。

明治二十七年九月廿九日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

第三百九十九號目録

社説

時勢觀
　夢幻の人
　惜しまるゝの今
　發見の道
　感謝して捷報に警しむ

女學

少年教育 日曜學校教任者心得

開書

樺山中將（井上次郎）
山路中將
朴泳孝
大鳥公使
伊藤伯
後藤伯
井上角五郎氏

家政

樂しき眞の家庭（下）白衣

徒然草

元冦（無光子）

論説

外美內醜の僞德（上）潮陽
（一）其定義（二）其の現象の一斑（三）其の起原、影響○自然淘汰の作用○ 社會的影響 ○個人の特質（四）似而非象との混淆○謙遜との關係○禮儀との關係○職業其の他との關係（五）其の毒害○至誠の念を欠く○ 眞心の制裁を蔑みす

書架

日清交戰錄、日清戰爭實記
彥根女學校同窓會報告
中京文學
はづかしみ
七十一番歌合

随感

患難中の欣喜
信仰の富有
平安のさち
野べのやどり
武將のたしみ
捷報の來るとき

寄書

昨年の歸郷（桂林子）

史傳

熊澤蕃山（其四）駒田信夫
逸事一二
名聲赫々
閑居の身 附佛徒に對する見

時報

彥根女學校の近況○ 倚松園女塾の開塾式○ 玉の浦女學校◎婦人從軍歌 ○婦人慈善會の現況○函館婦人會 ○福岡婦人協同會○特志看護婦會 ○奇特の婦女子 ○奇特の老婦人○赤十字社看護婦の出發 ○横濱婦人恤兵會 ○貴夫人の贈品に對する相浦司令長官の謝辭 ○貞婦茶谷たけ子 ○母の忠肝其子を勵ます◎東京風俗一斑 ○風俗壞亂にて演劇の停止 ○結婚と離婚○莊內新報の女學生

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌
第三百九十九號
明治二十七年九月廿九日發兌

社説

時勢觀

夢幻の人

事を視ること直接ならず、つねに雲霧模糊の間だに揣摩し、漠々として空しく過ごす所ろの人を夢幻の人と云ふ。彼は衝突せざれば覺醒することなし。たとへば夢に歩行する所ろのもの、撃突して初めて目さむるが如し。偶たま目醒むるも、恍惚として尙ほ夢中の樂しみに迷ふ。翼ありて飄々として太空にかけり、鰭ありて洋々として海底に泳ぐ、其の悟樂未だ忘ずること能はず。なごりの香り、袖に薫じて、徒らに衣裳をひるがへせば、奇芳馥郁として更ためて夢に入るの心地のみする也。

斯の如き人は、遠きを美として近きを醜となす。土階三等は有がたけれども、敷居ひくき小家はむさくるしとし、茅茨きらざるは、聖人の住ゐにして、屋根漏るあばらやは俗人の家居と認たむ。こゝを以て、斷えず英雄を歴史に慕ひ、之れを眼頭にもとめず、紙上の人は大率ね大人にして、地上の人は大抵小人なりとし、文字には靈の性あるが如く、言語には俗の氣あるが如く、苟しくも我を去ること遠ければ則はち價値ありとなす。價値は距離に比例すとなすか。遠山のかすみは、川の上の淺霧と異なり、高嶺の雲は竈の煙りと同じからずと言ふこと、即はち彼が最上の哲學なり。

故に彼は、三十年前の維新を慕ひて、方今の大維新を覺らず、神武皇帝の親征に感泣して、大元帥の現に廣島に居ますことを確認せず。其の夢みること大率ね斯の如し。

惜しまるるの今

激變騰貴したる土地を惜しみて、もし彼時に在らんには、早く買ひ置くべかりしにと言ふ。左れど足下に踏む所ろの其地

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

も亦た十年ならずして同一の運に遭遇せんことを思はず。如此き人は、現今北海道の未開地に注意することなくして、將來亦又之を惜しむなるべし。

風雲際會の幸運によりて立身出世せし高等官を羨やみ、嗚呼吁、我もし彼時に在らば則はち亦た非常の伎倆を顯はす可りしにと言ふ。左れど、眼前つねに風雲あり、何れの時も際會の好機なきにあらぬを思はず。幾度か機會運り來りて、見よ戸の外に立ちて叩くと雖ども、遂に起ちて開くことなし。斯の如き人は、遠からずして、亦又彼の時こそ惜しかりしと憾むなるべし。而して、其の憾む時の更に惜しまるる時なることを思はず。

眼こを擧て見よ、今◎と云へる眞の今は、即はち日本絕古の最大機會にあらずや。此の機會に逢着して未だ活眼を開くこと能はざるものは、遂に亦た何れの時にか目醒むることをせん。機會は神聖なり、其の高潮は天運到來の兆なり、靈なる攝理の聲ありて「今」と號令す。此時尙ほ起たざるものは、惰弱の卒なり。起つ所ろの義兵を嘲けるものは嫉忌の小人なり。

大凡そ、人、機會を透察するときは、才子と嘲けられ、之に乘ずれば、投機者とせられ、之に後るれば、迂とせられ、之に冷やかなれば、世すて人とせらる。人世の淸からざるや、到底、非難の聲は絕ゆ可らず。要するに、自から確信して斷乎實行するの外なし。

昨日の人あり、今日の人あり、明日の人あり。更に一昨日の人あり、明后日の人あり、今日の現時の人あり。人は先づ現時に生きざれば、即はち死せし人なり。

發見の道

進化發達を人生の大道とす。故に、人は進步なかる可らず。而して、進步は、發見によりて來る。

人の先づ進むものを、先進と云ふ。先進の先進たる所以は、其の發見力あるに由る。預言者、何ものぞ、時勢に中して、最大緊要の道を發見するもの也。聖人、何ものぞ、濁世に居り、汚時に混じて、義の大道を發見するもの也。道德の人、其の善を行はんとせば、其方法を發見せざる可らず。學者、其理を研究し、其の研究を實行し、其實行を有益にせんとせば、發見なかる可らず。技師の工藝に於ける、詩人の美に於

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

ける、論客の立義に於ける、紳商の利に於ける、政治家の經綸に於ける、皆な其の發見の度の多少によりて、優劣先後を生ず。

故に、發見は、進歩の前驅、發達の導師なり。此力を有するものを、人の中の先進とし、人は之に誘はれて人世の歩みを爲す。發見の尤とも高きものは、卓見なり、其太はだ高きや、一世を驚動す。やうやくにして、凡俗皆な之を悟識するに及んで、即はち平常となり、常人乃はち之を行ふ。

こゝを以て、發見は或は發明となり、或は預言となり、或は理想となり、或は希望となる。其の俄かに行なひがたきものは、固より其數なり。其急はかに行なひがたきの故を以て、直ちに之を輕んずべからず。凡俗、之を笑はざるを得ず、笑はずんば則はち大發見にあらず。

コロムバスは、地理に於ける預言者たり、孔子は道德に於ける發明者なり、日蓮親鸞は、宗教界の發見者なり。而して、此等は皆な其の發見力によりて如此し。

左れば、發見力、大ひに養なはざる可らず。其活氣は、活動によりて養はる。活動は、困苦の間だに成る。人、大ひに戰かはざる可らず、人大ひに難まざる可らず、如此くして活動あり、如此くして發見あり、遂に如此くして大進歩あり。

感謝して捷報に警しむ

必らずしも支那兵の過弱なるにあらず、我王師の太強なる耳。王師、何を以て如此く强きか。大元帥　陛下親から征し玉ふ。三軍の將士、生還の意なし、皆な殊死して戰ふによりて如此く强し。强きと如此きによりて、支那兵、則はち戰かふ毎に敗走せざるを得ず。

陛下、日夜軍裝を解かせ玉はず、遠征の將士、屢ば食に困す、既に義死せしもの數百名、そが家の遺族、所懷そも〳〵如何に。吾輩、國內に留守するもの、豈に寧日懶時あるべけんや。

先登は軍人の職なり、守成は政治家の職なり、糧を贈るは國民の職なり、家を守るは婦人の職なり、將來に備ふるは青年の職なり、靜かに考ふるとを廢せざるは學者の職なり。嗚呼、同胞、今や各自の戰場に於て一層、奮勵せざる可らず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學

少年教育 日曜學校教任者心得

第二回女子夏季學校に於て、安息日學校教任者の懇話會あり。席上續々として出でたる幾多の實驗談を概括し、其の要領を左に記載す。是れ單だ安息日學校の教授方たるのみならす、總べての少年教育法たり。即ち女學とす。

一　己れ先づ眞理に充たされ音節容姿居動總て兒女の摸範たらざるべからず。

一　行ひ得らるゝ丈け慈悲心を現はすこと特に下等社會の兒女に向つては最も然り雨天雪日又は寒き時暑き時など慰め、痛はり、褒め、勵ます等は力ある感化法なり。

一　先づ入り來る兒女には鼻汁を拭ひ帶を占め直し下駄或は草履の鼻緒など見てやるべし斯くして種々世話を爲しやると亦力ある感化法なり（子守の生徒ありて背上の赤子泣き出すともあらば暫時おろさしめて誰人にか世話し貰べし子守の難有感ずると是より大なるはなし。）

一　初めは淡雅なる禮式を教へ次に年齡相當の道德上の話を成るべくは繪圖等によりて簡單に直接に興味ある樣談話し先づ粗荒なる第二の天性を柔ぐべし談話時間は廿分より長くせざること。

一　以上を實施するには先づ能く兒女の性情境遇位置等を熟知し一々酌量を要すべきか故に其父母をも常に訪問すると大切なりとす。

一　慈悲心を現はし種々なる世話を爲して清潔を愛するの觀念を起さしめ禮儀を教へ單純なる道話を爲すとによりて或は鼻汁を垂らさゞる樣になり衣類を汚さゞる樣になり帶の占方も覺へ禮儀するとも覺へ父母の言付けを聞入れ使など能くするに至るを見れば其父母は先つ以て日曜學校は良きものなりとの考を起して益々兒女を奬勵し又教任者の訪問によりて其信任すべき貴人たるを知りて益々安心の心を高め近隣に吹聽して漸次生徒を增加し永續の生徒を得又其父母を傳導するの機會をも與へらるゝものなり。

一　組は成べく細かに別ち一人の分擔者は少數なる程宜しと雖も否らざるも滿六才位までを一組とし七才より十一才位までを男女に別ちて二組とし其上を又男女二組に別つべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一「カード」を利用すると大切なり赤き「ワク」などある小片紙に兒女に別り易き俗語にて認めたる短かき言葉を假名にて太く明かに印刷し一組には同樣のものを與ふべし幼兒の組には聖書の語ばならざるも宜しく、追々は聖書の金言を俗語に譯して印刷すべし。

一　道話は此「カード」に記しある言葉を本旨とすべし。

一　此「カード」は毎週一枚宛與へ五枚若くは十枚纒まる毎に美くしき草花若くは人物禽獸等の「カード」を褒美として與へ以て一は欠席なき樣奨勵し一は貯蓄の快樂を味ひ勤勉忍耐の習慣を養成すべし。

一「クリスマス」の當日は大小の「カード」を總て持參せしめ其最も多く所有するものには銅製の勳章を贈與し以て「クリスマス」其他の祝日等には胸間に之を掛けしむべし。

一「クリスマス」の贈物は最も注意するを要す十才以下の兒女には實用品よりも寧ろ玩弄品を良とす但し其品は各兒女の性情に注意して最も考案を盡さゞるべからず。

一　贈物は「クリスマス」の外にも時々臨時に爲すべし然らざれば通弊の如く「クリスマス」の當時のみ生徒増加し「クリスマス」經過すれば過半消去するの不幸を來す。

一　聖書の諳誦は全廢すべし意味を解せざる諳誦は大に兒女の軟腦を傷る。

一　幼年兒女の組には勤めて幼稚園主義を利用し出來得る丈け動植物金石等により實物教育を巧に爲すべし。

一　音節言語姿態の感化は已に明白なり特に姿態は内部の感情の記表として淡雅に聰明に用ゆべし。

一　音節は平易且優美にして常に言語と姿態とに調和せらるべし。

一　聖なる讃美歌を餘り速に又は亂れたる容姿にて唱はしむべからず。

一　讃美歌は從來のものより寧ろ說明せんと欲する一片の眞理と符合せしめ俗語にて兒女の耳に入り易きを良とす縱令拙くとも。

一　祈禱を敎ゆるは一通り効能現はれ善良の兒女となりたるを認めたる後なるべし。

一　祈禱は兒女の爲し得る禮拜の最も聖なるものなり故に兒女を敎導して祈禱せしめんに當り能く確實にして且つ聰明な

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るを要す。

一　先づ兒女の身躰をして祈禱するに適當なる態度を各自適應する如く持たしむべし即ち兩眼を閉ぢ兩手を束ね剛直敏捷なるものは拜跪せしめ柔和温柔なるものは直立せしむべし但し直立は天父の聖旨に速に順はんとの用意を表示し拜跪は謙遜の態度を示し兩手を束ぬるは此世の萬事を暫く心外に措きて其精神を專ら中心に集むるとを表はし兩眼を閉るは外界に閉ぢて神靈上の眞理に向つて之を開くの意を表示す蓋し兒女の禮拜は身躰全部の動作悉く連絡し互に相助て始めて其心を開き以て神聖なる感化に向はしむるを得るものなればなり。

一　兒女は決して長く同じ位置を保つ能はず又集意力の至て弱きものなれば祈禱は勉めて簡單にして直接なるべし且つ兒女自ら捧ぐる一言の祈禱は教師のなす多辨の祈より彼を益すると多きを忘るべからず。

一　祈禱を敎ゆる以前に先づ天父の存在を覺らしむべし決して注入して知らしむる勿れ。

一　神の存在を覺らしめんと欲せば先づ其前に草木花鳥昆蟲動物等の繪圖又は實物を携へ來らしめ（其以前に二三の實物又は繪圖に就きて話を爲し此次出來る丈け斯かるものを持參すべしと云ふ時は預想せるより澤山携帶し來るを常とす）之を創造の順序に從ひて區別排列し以て各部を精密に面白く說明し漸次に全部を意得せしめ夫れより萬有の如何に多きかを知らしむべし。

一　次に又實物又は繪圖により萬物の如何に都合よく如何に調和し居るかを知らしむべし。

一　次に一個の例へば索牛花を取り雌蕋雄蕋眞の花にして花瓣は其着物なる故を話し夫れよりあなたの其美しき着物を誰が造りて下されしかを問ひ母上なりとの答を得たる後然らば此花は斯かる美くしき着物を誰に造つて戴きしかを試み問ひ充分に疑念を起さしめ又一枝の薔薇花を取り此美しき花に何故斯かる刺あるか此刺は薔薇花の劍である此美しき花は板面小兒に狠りに折り取らるゝとを恐れて此劍を貰ひしなり扨て此痛ひ劍は誰が薔薇にくれたものでありましよう？と更に疑問を高めしめ斯くて充分疑問の高まりたる處にて此着物此劍皆神樣が下されたのである澤山な萬物皆一人の神樣が造つたのであると悟らせしむ。

六

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一　次には神の萬物を支配保育爲さるゝ有様を敎ゆること是れには種子を發芽せしめて其芽を生じ葉を出し漸次生長し行く有様より、一粒の米を植ゆれば稻を生じ多くの米粒を得一粒の烏麥を植ゆれば多くの烏麥を生ずる有様を敎へ（此際は生長の觀念を生ぜしむることと一の善行は多くの善行を生じ一の惡行は多の惡行を生ずるなど心を用ゐて敎ふべし）夫れより空飛ぶ烏の生涯より草木昆蟲に至るまで悉く神の愛育し給ふことなるを敎へ又野に生ずる百合の花などを學ばしむべし。

一　斯かる敎授は出來得る丈け天然の實物を利用するを希望するか故に日曜學校の近傍には原野森林等あるを最良とす即ち隔週毎に屋內と屋外とに開塲し得れば大に効能あるを認む

一　兒共に面白味を覺へしむることは連續して來らしむる爲め及靈性の開導上にも頗る利益あること故敎師は三十分なり一時間位は早く來り居りて早來の兒女と共に仲間になりて幼稚園的に面白く遊ぶべし若し運動塲など構內に在らば更に好都合とす然れども餘りに過勞せしむる時は講話の時睡眠を催ふすもの故其度合は最も注意を要す。

閑書

樺山中將

井上次郎

大西鄕、鄕を出でんとして君を拔擢し君に後事を託す。君が彼に於ける知遇の恩あり、爾來ひそかに許して其衣鉢を襲がんとし、鄕人亦之を以て推す。君、熊本城に入ては、此の知遇の恩人と對敵し、彼をして吁樺山なかつせばと長歎せしむ。君曾て刄を懷ろにして、先輩黑田を屈せしめ、亦た一紙を供えずして議塲三百の名士と强辨す。終歲、笑ふことなくして、豪氣万斛の涙あり、巨胆、斗の如くして、寸心奉公の忠にむせぶ。慨然意を決して起ち、大ひに要求する所のものあつて軍令部長となる。眼中、英魯なし、艦頭すべて敵。一身國に許し、五軆すべて胆。君もとより細心潛々の苦慮あらん、何んぞ敢て暴虎の勇を爲さんや。然りと雖ども、君を念ひて君に望む所ろのもの太はだ多し。冀はく長く健在して帝國の武德を大ひに發揚せよ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

山路中將　　井上次郎

何の風流魔ぞ、久しく君を花の都にとゞめんとす。成歡の兵敗れて、一叱し、牙山戰ひなくして長息し、野津の先んずるに及んで慷然として安んぜず、平壤陷いるに及んで君遂に坐すると能はざる也。然りと雖ども、大元帥陛下の君に命あらんとするや久し。君須からく安意して、入北京の御令を待つべし。大鷲、搏たんとして巨翼を縮む、君が鬱勃の迸ばしらん時や、目ざましからん。

朴泳孝　　同

早く歸去來の聲を聞く、何處に向つてか歸らんとする、朴氏決して日本に歸る可らず。

大鳥公使　　同

善く戰ふの大鳥、能く名分を守る。嘗て西南に役するとを謝して、今や則はち大義の爲めに使ひし、幕末の名士餘薰高し。翼はくは、大案を具して細則に入らず、武道に依りて、法令に賴まず、熾んに熱氣を吹ひて、韓廷の弱冷を聳動せよ。大聳動あらずんば、韓廷遂に改まるとなけん。

伊藤伯　　同

人は傳ふ、伯一と度び朝鮮に渡らんと。伯や、決して往く可らず。伊藤博文氏は可なり、日本の總理大臣は若く輕々しく動く可らず。

後藤伯　　同

勝伯評して曰く、餘り日本には大き過ると。余は其の大小を知らず。左れど、號して日華となえ、抱負、支那日本の上にありし所の彼は、更らに高麗をも加へんとしたり。余輩は彼が渡韓に不同意なりしが、今や幸にして中止せられたるが如し。之れ大ひに慶せざる可らず。

井上角五郎氏　　同

君も亦た渡韓を中止せられたるか。炭礦の社も今年は、邦家の爲めに大ひに忍ばざる可らず。

家政

樂しき眞の家庭（下）

白衣

樂しき家庭、何ぞ夫れ名の善きや

願はくは、樂しき眞の家庭を天の園に建てしめよ。夫は全身を擧げて妻に委し、妻は己を捨てゝ夫を奉ず。夫は妻を愛するが爲めに、嚴肅なる戒を與へ、妻は夫を敬するか爲に鋭き諫の利劍を彼か胄に供するなり。夫道の爲めに力を盡す時、家を顧みず、妻を思はず、之を荊棘の中に捨てゝ快しとなす。妻夫を思ふとき、情を殺し、愛を亡ぼして顧ざることあるなり。神は其大なる愛を知らしめんが爲めに、余等に夫婦の愛を與へ給へり。夫婦の愛は愛を狹くするか爲めに非ずして博くするか爲めなり。余等は世間を愛せんが爲にキリストを愛するに非ずや。キリストの愛はキリストといふ偶像に捧ぐるに非る如く、夫婦の愛は夫婦といふ偶像に捧げらるべきものに非るなり。

『燈を燃して斗の下に置くものなし、燭臺に置て家に在るすべての物を照さん』余等が得たる愛の生命は、野邊に咲ける花にも及ぼすべし、惡魔の擒となれる罪人にも及ぼすべし。手の屆く總ての所に之を及ぼすべし。神は余等が初年時代を過ぎて、物を識り事を辨へ、是より天地の間に入り、人間の世に出でゝ、大に其力を盡さんとするの時期に於て、此生きたる精靈を下し、余等をして己を捨ててキリストの十字架を負ふに堪ゆるの力を與へ給ふなり。其惠みを、余等は如何で自己の慾に渡して可ならんや。妙齡の女子、男を得るに及んで、頓に外に對して冷淡となるは、甚た望ましからざる事なり。彼女が男の戀人たるは、世の戀人たらんが爲めの學校なり、彼女は此學校にて得たる處を世に與ふるの責任を有するに非ずや。夫が彼女を愛する如く、世も彼女を愛せんとして、待ち望みつゝあるなり。彼女は一方には夫を捧ぐる愛をもて、一方には世に捧げ、世をして暖かく樂ましむる日光となるの、重き天職を有するなり。男か戀人の爲に依賴さるゝは、世か彼に依賴せんが爲なり。男か戀人の爲めに己を擧げて支柱となすは、世の爲に身を捨てゝ、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

天下の支柱とならんが爲なり。神の愛は夫婦の愛なり、夫婦の愛は世の愛なり。余等此愛を得て、之を世の爲にするを得ば、庶幾は以て、神恩の幾分を報ずるを得ん。

　世の爲に夫婦の愛を捧ぐるは、

戀の使命なり。樂しき家庭は所謂樂しき家庭として望むべきに非るなり。一つ燈の下に書を繙きて、詩情を談ずるの談を知らば、など世と共に眞の道に歩むの樂を解せざるや。夫の外より歸りて勞れたるに、愛もて暖めたる一椀の茶に、彼を慰むることの、妻の務たるを思はゞ、など炎天の下に在る砂漠の如き世間に於て、渇き勞れたる行商の苦げなるに、涼しき影を與へ、清き泉を與へて、彼等を勵すことの、己が天職たるを覺らざる。十間四面に充たざる、多くとも十町の半ばにも及ばざる、箱の樣なる建物の中に、樂しき家庭を見出さば、など幾億万の同胞の充てる、限りなき覆載間を以て、其働き塲とするの望を起さゞる。神は余等夫婦の力に應じて、夫れ〳〵の天職を授け給へり。或は此方に盡すべし、或は彼方に盡すべし。或は十人に及さん、或は百人に及ぼさん、或は萬人にも、大にしては世界にも及ぼさん。家より外には一寸も力を及ぼし難しといふの口實をなすとも、誰か其愚を笑はざらん、是れ能はざるに非ずして、爲さゞるの罪なり。余等かくして夫婦の愛を思ふとき、世の所謂樂しき家庭なるものゝ甚だ狹小なるを感ずるなり。

　夫惱みに沈むとき、

汝妻は汝の靨をもて、夫の腦天を覆ふ黑雲を抹し去るに非ずや。夫怒に堪へざるとき、汝妻は汝の暖き手をもて、夫の額上に立てる青筋を拂ひ退くるに非ずや。夫が世間の憂き涙にゆられ、鹹水を呑んで苦悶するとき、汝妻の露帶べる眸は、夫をして温泉に浴せしむるに非ずや。夫が貧窮の險しき峠に遮られ、巖石に躓きて落膽するとき、汝妻の珠の如き聲は、夫をして大道に在るの思を爲さしむるに非ずや。世の生命は殆んど汝に懸れり。氣世を蓋ひ、力山を拔くの勇夫も、汝が小指の一彈には、乾ける小豆の如けん。汝の天職大なる哉。汝若し穢れんに、夫も世も穢れん、汝は其大旗の神の前にうちたてざる可らず。夫をして戀々として、汝が傍に在るを樂ましむる勿れ、汝が爲めに美服を供ふるを喜ばしむる勿れ。汝が爲めに佳肴を備へしむる勿れ、高樓を築かしむる勿れ、

黄金に垂涎せしむる勿れ、虚榮の地に在らしむる勿れ。汝は汝の天使の如き、月の如き、花の如き愛をもて、夫の沈み易き、浮き易き、左し易き、右し易き、荒れ易き、靡き易き心を勵まさゞる可らず、正さゞる可らず。汝亦之を廣く世に及ぼせ、友に及ぼせ、而して全く己といふものを忘れ、家といふものを忘れよ、夫といふ形骸を見ること勿れ。眞の家庭は築かれん、神は汝に勝利の冠を與へ給はん。

夫なるものよ、妻なるものよ、汝等は誠に幸なる哉。妻なく夫無きもの、如何でか汝等の樂を知らんや。四邊に集る、恐ろしき狼にも、汝等は相抱きて笑ひ、足下に起る、烈げしき大浪にも、汝等は手を握りて語る。譬へ山川を隔て、顯冥境を異にする時に於ても、汝等の靈は交はりて、相接吻す。汝等の清き愛は天地に滿ちて消ゆるの期無けん。

余等美しき心の家に住まば、

何ぞ破屋を憂へんや、余等の愛にして放れずんば、何ぞ雙棲をのみ是れ求めんや。夫婦の目的は是に非ずして彼に在り。樂しき家庭は、世の衣食住足り、位官名望高き間にも非ず、家族一室に團欒して、外形の平和なる生涯を送る間にも非るなり。平和は調和の在る處に在り、キリストの十字架を除きて眞の平和あるなし。夫婦は十字架を取りて、神の前に清く並び立ち、重き荷も互に分ち、共に荷ひて、慰め盡きせず喜び樂まむが爲めなり。手を取りて歩み、膳を同ふして食ひ、褥を同ふして座し、靜かに相樂まんことを冀ふて、余等の天職を忘るゝこと無からんを要す。いかに住ひ、いかに暮し、いかに樂まんと思ひ煩ふを要せず。戀の爲め、家庭の爲めに何も心配するを要せず。只余等は共に喜ひて主の道に進まんことを望むべきなり。神は與ふべきものは與へ、與ふまじきものは與へ給はざるなり。余等何ぞ世の形を思ふべけん、捨つるものは與へられ、求むるものは持てる者をも奪はれん』。

樂しき家庭を叫ぶの人よ。外形の徒らに穩にして、風波の隱れ、腐敗の潜み、無氣力といふもの〻流行し、逡巡といふもの〻汝等を横領し終るを知らずや。樂しき家庭は、之を捨てされば得べからざるなり。天國は盤石なり、此上に建てられたる家庭は榮へん。世間は砂礫なり、此上に建てられたる家庭は遠からずして滅び失せなん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つれぐ草

元寇

無光子

大神の御心に成れる我端穗の國……仰ぐべき哉
天の巖戸開けてより　煌々光明六合に亘る
威稜は嶄々富岳に聳え　御惠洋々琵琶湖にあまねし
皎たる皎月曄たる旭日　天壤無極天照大神
讃むべき哉天の榮光　たゝふべき哉其大御手
日東は是れ萬國の崇め　大神の美　大神の正義

誰か仇なす……いかなれば蟷螂の身もて轍に觸るや
弘安四年夏の空　虜船は蔽ふ玄海灘
可憐十萬紅毛夷狄　生きて還るは僅に三人
底の藻屑か魚鼈の餌か　汝の使命は遂げられぬ
汝の眼何處に在る　此大八洲の御國を見ずや
猛虎の牙も毒蛇の舌も　朝日に打たれて消失せなん

天は低く水高く　草木も眠るやうしみつの刻
渚に寄する波音冴えて　虜船の燈消えなんとす
神兵の篝火殷々盛に　あたりを照して刀鎗きらめく
きらめく兜の星の光　類もなしや　勇ましやな
何處よりぞ　さと一陣の風　樹梢動き海水湧く
墨の黒幕天より下り　物凄く下界を包むぞ　不思議

あれを見よや……見よや　東の方よりも
火の如く灼く劔の光　稻妻の如く虚空を驅つて
風を切る音天笛鳴り　如何なる妖魔もいかでか敵せん
重る雲を分けつ縫ひつ　霹靂一聲電光閃き
風伯雷神百萬眷屬　大命を奉じて力を振ふ
雲大波渦き　海鐵馬奔り　風雨怒て乾坤破れん

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

檣飛び楫は摧け　檣櫂は空に跳り狂ひ
百千の艨艟木の葉の如く　漂ひ上ッて石片と沈む
汝の鋒は汝を斬り　汝の鎧は汝を重くす
槍は汝を海に突き入れ　楯は汝を友より隔つ
泣くは汝が鯨波の聲か　叫ぶは汝が凱旋の歌か
汝躍るは誇の舞か　汝走るは喜の報せか

神は御手を擧げ給ひぬ　大氣を吹き給ひぬ
勇め　進め　討てよ　斬れ　今ぞ此時
矢を雨と　刀を波と　ふちせよ　ひるがへせ　猶豫すな
天軍の威稜は余等に加はり　幻の如くに夷は失せん
時ぞ今　者共勵め　許すな　餘すな　紅毛奴
血もて　紅の海を染め　屍もて人のいかだを浮べよ

夷よ夷……義を知らざるか　大神を見ぬか
汝　蝎の毒の矢に　我この血しほを塗らんとするか
汝　狼の殘き刃に　我この腕を切らんとするか
夷よ夷……愚かにも又憐れむべき哉
飽を知らざる獸欲もて　何處の岸に狂はんとするか
道に違へる暴力もて　如何なる國に荒れんとするか

* * * * * * * * *

名殘の浪　青く靜かにしてゆるく廻り
大空晴れて　高く綠の天幕を張りぬ
東雲の横雲　紫の霞棚引き
錦の毬をかゝげて……ゆたかなりや　美しや
白雪を散らす　波うち際に
あはれや　黒く……數は算無し

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

論　説

外美内醜の僞德（上）

潮　陽

（一）　其の定義

世上、白く塗りたる墓の如く外美にして内醜なる所謂僞善、僞德の現象なる者あり。古へより聖賢之を嫌惡し、正義の士之を忌避せり。そも〳〵外美内醜の僞德とは何ぞや。云く、自己の外貌、擧動に現はれたる象の以て他人の意氣に叶ふや否やに掛念するもの、即ち外貌なる假りの象を美はしく飾り、其の内裏背後に潜む實象の德を研かず、單に容姿を立派に裝ほひて、其の本眞の面目を顧慮せざるものなり。

ハルトマン、其の著「審美學」に於て美假情と實情との混淆を敍するの際、一言之に及べるものあり。氏は之を審美僞德と名け定義して云へらく、抽象的に見れば、こは趣味の德にして、具象的に見れば、我が生活を技藝的に裝飾するの德なりと。至言といふべし。

........Sondern in fast noch höherem Grade als ästhetische Moral, d.h. entweder abstrakt genommen als moral des Geschmacks, oder möglichst konkret verstanden als Moral einer künstlerischen Ausgestaltung des eignen Lebens.

（二）　其の現象の一斑

外美内醜なる僞德の現象や、其の範圍廣漠なり。例へば外、恭敬を裝ほひて、内心に敬虔の念慮なきを顧みざる。外、謙遜なるが如くして、心高慢の念强きを思はざる。外、堂々たる威儀を示して、中に確固たる自信の心なきを憂へざる。外、言を巧みにし、媚を呈して、中に優美の情なきを顧みざる。外、極めて親切、叮嚀なるが如くして、内心野望を懷くが如き。外、儀式と作法とに從ふて、中、眞個に其人を敬愛するの情なき。外、言甘く、世辭巧みにして、中に貞操峻節の心情なき。外、美衣を纏ひ奢侈を極めて、中に財產缺乏し家庭の和樂なき。外、憐憫の樣を表はして、中心、殘忍の奸計を企つる如き。外、虛威張りの勇氣勃々、禁じ難きが如くして、内心、競々焉として恐縮する如き。皆な是れ外美内醜の現象ならざるはなし。夫れ外に、斯の如き言語、擧動、容貌ありと雖も、内心確乎たる敬德の伴ふとなくんば、外形に飾る其の美、そも何等の價値か之れあらん。蓋し道德は人の生命なり。人の外美は樹梢の如く、内德は幹の如き者ならずや。

（三）　其の起原、影響

されば、此現象は生理的、心理的、倫理的、審美的、社會的作用關係より生ずる者なるを知るべし。是等の中には社會的に一見、便宜なる者あり。或は審美的に忌嫌すべき者あり。或は心理的に矯正すべき者あり。或は教育的に排斥すべき者あり。或は生理的に不得止ものあるなり。而して其の原由し又影響する所は、自然淘汰の作用なり。社會的影響なり。又個人の特質より生じ來るものも少なからずとす。

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

(イ)自然淘汰の作用——小猫が小庭前に遊びつゝ、花に戯る蝴蝶を捕へんとするや恰も眠れるが如く靜かになり。蟬の樹梢に鳴くを噛み食はんとするや、除々として攀ぢ上る如き。狐が鷄を捕へんとするや、最も靜かに最も狡猾を極むる如き。小供が己の慾望するものを得んと欲して、何事も知らざるが如く空嘯きつゝ、父母の容貌を伺ひ知らぬ間に取るが如きを始め、日常大人の爲す所も、自然に淘汰せられたるもの多し。彼等は斯く僞さゞれば、已が慾望を遂ぐると能はざるを、實驗したるが故に、斯かる現象を呈したる者なれば、外を美にする僞德は生存競爭の結果なると、疑を容る可からず。

(ロ)社會的影響——僞德の現はるゝや社會的の影響最も多しとは日常見聞する所にして、內心忿怒するも今之を表はすとの將來、自己に不利なる者あるを感じて、外、笑顏を呈する如き、所謂「虫を殺して辛棒する」とあり。又多衆の集合せる席上に於ては「禮に非ず」とて「我を折る」とあり。又上位の人に對しては、不快の念慮あるも、之を口外せば他日自己の生活上に悪響あるを恐れて止むとあり。同等の位地にある人に對しては、言ひ表はさずして可なることも、徒らに之を表はすとあり。要するに已れより上位にある人に對しては、謙遜と禮儀の制裁とによりて、大率順柔温和なれども、同等の人に對しては、禮儀嚴肅を欠き、殊更に謙遜するを要せざるが故に、前者に比すれば、外美內醜の僞德は少なく現はるゝなり。而して和樂せる家庭に於ては、此現象は殆んど之れなしと云ふも不可なからん。されば此現象は、所謂「他人」特に已れより上位に在る人に對して、最も多く現はるゝ者なりと云ふべし。

(ハ)個人の特質——個人の性情特に倫理的に關する者は、大凡社會の造る所なりと雖も、又遺傳の良悪、財産の貧富、職業の差別、身躰の健否、敎育の適否、家庭の和不和等、凡て個人を繞圍する境遇によりて各個人の性情を異にす。此差異や蓋し萬世避くべからず。而して此特質あるが故に生理的、心理的に種々の形式を以て此の僞德を表すに至るは、極めて見易き事實なり。例へば身躰虚弱にして、姉妹をのみ兄弟とし、成人の後も宗敎的の感化を著るしく受けたる男子は、大率、温和にして容貌恰も婦人の如く、誰人に對するも靜肅なる如き。或は又敢て喜怒を色に形はさゞる者の如き、其の他、例證枚擧に遑あらず。之を個人の特質より來る者と云ふ。

(四)　似而非象との混淆

外美內醜の僞德の現はるゝや、有識的即ち故意に出つる者と、無識的即ち習慣に出つる者との別あり。前者は最も悪むべく嫌ふべしと雖も、後者は容易に忌み嫌ふべからざると共に、排斥し能はざる事情伴ふが如し。即ち此僞德の或る種類の者に至りては、外美內醜と似而非なる形象、即ち謙遜、禮儀等と相錯誤し混淆して、隱現出沒變化極りなき者あれば也。

(一)謙遜との關係——外美內醜は謙遜にあらず、蓋し謙遜とは內に醜なく外に飾りなき眞面目の者なり。一見すれば多少外美の分子を包含するが如しと雖も、こは眞義の謙遜にあらず。之れ唯自ら能ふとを信するも、或は失策せんとを掛念し

て「出過ぎぬ」紊ちを誤解したるより來る者のみ。抑も眞の謙遜とは有りの儘の能力を倫理的に多少制限して表す者なり。然るに外を飾りて、温和に、叮嚀に、靜肅に擧動すれば、人其の中に陰險奸策あるを悟らずして、外貌擧動言語によりて時に之を謙遜と誤認することあり。こは初對面の場合に多しと雖も、決して此に限定すべからざるものあり。

（二）禮儀との關係――禮儀とは社交を整理する一要具にしてこれ亦生存競爭より自然に淘汰せられたる結果に外ならず。而して之を發達せしめたるは、心理上より之れを見れば人性秩序を好み、順序を欲するの情質あるに因り、社會上より之を見れば、弱者が强者に對して敢て反抗するの意なきを表するに基げる者なり。彼の平身低頭再拜する禮も、手を袖にして顏面を掩ふの禮も、昔武士が刀を脇側に置きて後、禮する紊ちも其の形式は正しく「和らぎたる紊」ならざるはなし。而して禮儀は社會道德の進步と共に簡となり、互の間親密なるに從ひ單となるは、互に反意疑念の減少したるを表する者也。

支那古代に於ては禮儀なる者、大に繁雜にして道德と相表裏したる者なり。曰く禮儀三百、威儀三千と。げに聽くにも、視るにも、遊ぶにも、立つにも、坐するにも、寢ぬるにも、勞するも、食するにも、飮むにも、笑ふにも、起きるにも、皆な禮による者とせり。蓋し現今支那形勢の保守的なる因循姑息なる外形に拘泥する等の習俗、皆な之れ三千年以前に胚胎したる者なり。支那古代の所謂、禮とは抑何ぞ云はく、

◎夫禮者所以定親疏、決嫌疑別同異明是非也

◎修身踐言謂之善行、行修言道、禮之質也。

◎道德仁義非禮不成、敎訓正俗非禮不定、分爭辨訟非禮不決君臣上下、父子兄弟非禮不定、宦學事師非禮不親、班朝治軍涖官行法非禮威嚴不行、禱祠祭祀供給鬼神非禮不誠不莊。

◎先王之立禮也有本有文、忠信禮之本也、義理禮之文也、無本不立、無文不行、禮也者合於天時設於地財順於鬼神合於人心理萬物者也。

◎無節於內者觀物弗之察矣、欲察物而不由禮弗得之矣、故作事不以禮弗之敬矣、出言不以禮弗之信矣、故曰、禮也者物之致也。（以上、「禮記」より抄錄）

又、鸚鵡能く言ふも飛鳥を離れず、猩々能く言ふも禽獸を離れず、今人として禮なくんば、能く言ふと雖も亦、禽獸の心ならずやと云ふとあり。是に因りて之を觀れば、禮のとたる支那古代に於て社交上、寸時も忘却すべからざる重要の者なりしは明白なり。此れを以てかの外美內醜と比較すれば、二者日を同ふして談ず可かざる者なるを知るべし。然るに今日の所謂「禮儀作法」に從へば內心奸惡なる人も、容易に之を判知せざるが故に、虛禮に拘泥するとを務めて、內德を脩むるとを等閑にするに至る。外美內醜の僞德と禮儀との混淆するや、蓋し少しとせず。

以上、謙遜と禮儀との外に、職業其の他の關係より、無識的即ち習慣となりて現はるゝとあり。之を不得止者と稱す。

（三）職業其の他との關係――例へば商人の如き、買客入來りて彼此徒らに評定し、時間を浪費せしめ、品物を購求せずし

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

て歸らんとするも、其の迷惑を忍び叮嚀に、溫和に待遇せざるヿを得ざるは、商店の信用を保持せんが爲めにして、內心大に不快を感するも之を外貌擧動に表すヿ能はざる者なり。又一種の醜業婦が男子を擒にして掌上に弄し、利を得んとするや、顏面を扮飾し美衣を着し媚を呈し、美男子たると醜男子たると意に適ふと否とを問はず、親切に待遇せざるを得ず。又車夫が如何なる位地の人に對するも「旦那」と稱呼せざるを得ざるが如き、是等は大凡職業上より來る必然の結果に過ぎされども、亦內醜を顧みずして外美をのみ飾るの習俗を發達せしむるものなり。されば或る種類の外美內醜の現象は、現時の勢ひ、僞德といはんより不得止的方便となる者あるを知るべし。故に此現象は生存競爭上より、種々に變化し來れる者と云はざるべからず。而してこは社會の進步に伴ふて漸次、増加するの傾向あるが如し。即ち犯罪の文明に伴ふ如く微妙に變遷し來る也。

（五）　其の毒害

想ふ、外美內醜の現象は、不得止の結果ならんと。彼等は自ら好んで爲す所のものに非るべし。蓋し肉眼に映する所の表面を裝飾して、敢て內裏の醜穢を顧みざるは、吾人の天性に背反する者なり。故奈何となれば、吾人は內外を問はず、共に眞ならんと、善ならんと、美ならんヿを欲して、止まざる者なればなり。此性や恰も水の下流する性あるが如し。其の異變の現象を呈するは、或る事情の妨害する者ありて、生じたるものなり。蓋し性素と善惡を以て論すべからず、善惡は之れ社會の造る所、人性故來所謂善惡の色彩なし。然れども人生社會を結局學的に大觀すれば、人情は眞。善。美を追求して止まざるの質あるなり。果して然らば、外美內醜の現象には必すや或る他の事情の存する者ありて、眞面目を表し得ざるによりて現はれたるは明かなり。

されば此者たる、社會倫理學、社會病理學の上より見れば、一種の社會病理的現象たり、又個人僞惡的現象たるを知るべし。今其の一二の害毒の影響を敍せん。

（ア）　至誠の念を欠くが如き、其の最なる者なり。人生、至誠の實德あらんか、謙遜と禮儀とを表するに際して、殊更に外貌、擧動を美飾するを力めざるも亦可ならずや。外美を力めて飾るものは、蓋し至誠の人、正直の人、眞面目の人に非るなり。已に至誠を欠く、害毒の影響や察すべし。（イ）　良心の制裁を微弱ならしむるの恐れあり。吾人倫理上の制裁に二あり、良心及び社會の輿論之れなり。外美に拘泥して內醜を顧慮せざる者は、一時社會の制裁を免ると雖も、良心の制裁を免るべからず。若し又神の存在を信仰する者なれば、宗敎上の制裁あり。而して人生は此等の制裁を奉じて、之に從ふを以て道德の進步を來す者なれば、之に反すれば則ち仁義道德をして遲滯せしむる者なり、其の他、敬德の念を欠き、撙節の操を欠き、天眞爛熳の美を掩ふ等、要するに此僞德は萬惡を惹起して、優美の情感を排除するに至る者なり。之を以て古へより僞善、僞德の徒は、彼の偶然に犯罪したる者に比して、遙かに蔑視せられたるは、自然の勢と云ふべし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

書架

○日清交戰錄、日清戰爭實記

春陽堂先づ日清交戰錄を發兌したるに、博文館も亦た日清戰爭實記を出版せり。これ高ともに數万部に上るときけど、相ひ競ふ所ろ、亦これ一種の戰のごとし。一長、一短、各、優所あり。何れも廉價なれば、双つ乍ら購讀するも可なり。

○彦根女學校同窓會報告

こゝに其第一號に接す。夙に女子教育に熱心なる甫守官吾君この校に長たるが故に、もとより此計畫なかる可らず。校運の彌よ隆盛に趣むき、其同窓會の追々團結せんこと疑なし。

○中京文學

地理書に云く、名古屋は三府に次ぐと。されど名古屋の文學者之に安んぜず、東西二京の間だにありとて中京と稱し、其の特殊なる文學雜誌を發刊す。彼地磯貝雲峯、赤司繁太郎等の諸氏あり、もとより此抱負なかる可らず。但だ表裝の趣むき、社告の文躰、酷はだ「しがらみ」草紙に似たるぞ奇しき。

○はづかしみ

此情の成質いかにと、心理學上より哲學者として之を研究したるを元良勇二郎氏とす。云く、他人の心中にある自己の表象の位地を下したるを知り或は斯く想像すること(一)、自覺發達の后は第一の狀態に加ふるに自己自から自己の拙劣なるを自認すること(二)、の二個の狀態より來ると。詮じ來れば、必竟自明の解釋たるが如し。

○七十一番歌合

此は多く得がたき珍本なるを、經濟雜誌社の出版によりて、今は何人も容易すく購讀することを得べくなりぬ。繪のさま、ことばがき、歌合せの調、何れも當世の風俗をうつし、妙味言わんかたなし。足利のさまは、旨と此態にて候、御覽候へ、めし候へとものいふ心地す。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○患難中の欣喜

むかし曾て朝鮮の亡客が所感にきくとあり。彼れ革政のいくさ乍ち破れて、身を以て我國に逃れ、朝夕逐人を恐れて安き心もあらざりしが、偶たま聖經の句を讀んで、慨然として歎ず。その句に云く、

　患難にも欣喜を爲す

欣喜とは雀躍大悅の謂ひにあらずや。夫れ、忍んで患難に耐ゆるものもあらん、耐えて平安を維持し、漸やく將來に望みをかくるものもやあらん。左れど、患難なるが故に欣喜雀躍して、手の舞ひ足の踏む所ろを知らざるが如きもの果してありや。ポウロは則はち「然あり」と告白す。あゝ、患難に欣喜す、これ抑そも何等の福音ぞや。

○信仰の富有

世の事に失望したるが故に、神の御座に望をつなぐ。世の患難になやむが故に、神の恩寵の仁露にうるほふ。さびしき時に、慰さめあり。勞れし時に、いたはりあり。戰かふ時に、力あり。詮ん方つくれども、望みを失なはず、何も無けれど尙ほ富めるが如し。此般、澤々たる温柔の平和は、天父の聖にして嚴そかなる大愛に全委するによつて得らるべし。

○平安のさち

神は靈なれば、靈をもて賜物とす。必らずしも形あるものを賜ふとなし。餓たるものゝ祈りは、食を與へらるるにあらず、食せずと雖ども尙ほ餓えざるの糧を與へらる。こゝをもて、神の賜ふべき平安は、必ならずしも、無事常穩の平安にあらず、激闘亂戰の間だに安んじて、何如なる光景の下にも能く平らかなるとを得せしむるもの也。聖經に云く、神は見過ぐしに爲玉ふと。嗚呼、大慈大悲の切愛を以てして、屢ば困倒究迫の人を見すぐし、其の難やみにもまるるが儘に放任し玉ふ。これ豈に御神の御愛に於ていくそばくの御歎きぞや。左れど、即はちこれ其の大愛の在る所ろなるとを思ふに於て

は、祈るものは形に於て報ひを求む可らず、祈りたる以后、際會する所ろのものは、すべて其の御答へなりと信ぜずや。吾等は、天父の子なり。吾等は、天神の兵卒なり。彼の聖なる大愛の御父、彼の力ある御神、いかで吾等を棄て玉ふとあらん。吾等、何如なる時、何如なる所、何如なる患難、何如なる迫害のうちにも、感謝して坐すべし、これ即はち其の置かるゝ所ろなれば也。之を平安の幸福とす。

○野べのやどり

大國の王も倒れては地に印する所ろ、六尺の丈けに過ぎず。一世の英傑も、終に臨みては、白露の歎きに堪へず。金殿玉樓ありと雖ども、安臥しては、疊一ひらより出でず、山海東西の美味ありとも、飽食しては皿一枚を過すこと能はず。人間、分に安んずる時は、到る所ろの青山皆な古郷にあらずや。情けを殺ろして只管ら利己の備えを爲し、人を傷めて冷ややかに私慾の安住を構ふるとも何の益あらんや。むかしノアの船大工は、救の船をつくりて而して身は洪水に溺れて死しぬ。永久、休らふべき安息蘆は、安くんぞ斧と木材とを以てつくりたるもののうちにあらん。古人うたふやう、

何せんに玉のうてなをみがきけん
野べこそつひのやどりなりけれ。

○武將のたしみ

戰ひは武士の舞臺にして、丈夫の情け、男兒の威儀こゝに集まる。されば、日本將士の戰場に臨むや、堂々たり、肅々たり、美々たり、麗々たり。天地八荒、照覽せよ、坤輿万民、物見人たれ。武士の情け、もののふのあわれ、いくさの風流、たゝかひの禮儀すなはち如此しと。彼等は、あらゆる文明國の戰ひよりも尙ほ文明の戰を演す。これ先代の武將が有がたき遺風にぞある。鎧の袖に散る花をうけとめ、箙にかざす梅の香りを放つの類ひ、豈に絶世の風流にあらずや。見よ、万國のつわものども。日本古今の將士がたしみ、大率ね則はち斯の如し。

○捷報の來るとき

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

平壌の捷報、市に傳はるとき、直ちに狂喜して絶叫せしものは、恐らく遠征の人に縁故なきもの也。我軍大ひに勝つと聞きて、一度び大慶し、更にひそかに憂ふるものあり。花々しき凱旋をおもんみて、別に暗雲のかゝる天あり。我夫はいかに。我子はいかに。こゝに國の大捷を賀し、公けに家の榮れを祝し、微笑して國旗をかゝげ、一様にして人のうはさに仲間入し、而して心中尙ほ一朶の雲はれず、數日にして、電光閃射す、打死の人名左表の如し。讀下す眼光其の明暗いかに。

寄書

昨年の歸鄕

桂林子

予は今饍に記す、實に昨年の今月にてありし、予は久しくさまよひし東の都を辭して、久しく夢みたる故鄕の庵に歸りぬ、五十三驛鐵路滑かに走り、午后五時過ぐる頃予は三河の巴里なる豊橋驛に着したり、然れども予が家は、尙是れより東北に向ひ、十餘哩の山路を歩まざるべからず、因て予は此處に一泊を投じ、翌朝は此地の教會などを訪ひ、午稍々傾くの頃、再び歸鄕の足を起しぬ、一歩は一歩より我家に近づくを思へは、路を夾む兩側の山々も、何となく喜ばしく見へぬ、當年は近年比類なき乾魃とて、至る所の田圃は龜裂の慘狀を呈し、農民の悲嘆は又我故鄕にも及べりと見へ、みち〳〵の茶店に、息ふ毎に、何れも皆予に同一の質問を起して曰く、旅の人よ、都の方は如何にや、こゝらあたり、既に一ト月餘り、雨と云へるものを見ず、田圃は枯れ、農民は泣けりと、其聲は啣々として誠に戀しけれども、其土音の純然故鄕の調なるを思ひて、予は益々鄕歸の足を急がせたり、行き〳〵て玉川村に到る頃、樸訥なる我村民の、荷車推押し行くに遇ひ、予は一層の勇氣を勵ましつゝ、總て落陽山の端に春くころ、爽かなる暗涼に乘じ、見渡せば煙霰林の間に沈み、村童の聲は靜かに山の麓に繞れり。滿腔の喜悅を以て、予は始めて戀ひ詫びたる故鄕の門に入ることを得たり、

『オヽ愛する我故鄕よ、乞ふ久しく爾に負けるを宥せ、多謝す、爾は如何に安らけく我父母と兄弟とを護り呉れしよ』予は一歩々々、低徊しては感謝の涙を揮ひつゝ、足を我家の門に進めたり、久しく都會の俗塵に惱み、乾燥無味なる他鄕の人情に飽きて、久し振にて我故鄕に歸りたる予が眼には、溪水に馬を洗ふ農夫、茅屋に水を運ぶ老婦の、如何に美はしく映じたることよ、限りなき感慨の間に、予が足は早や我家の門に入れり、此時予は始めて、予が留守中に父の經營せる、新住所を見るを得たり、此時迄は徒らに我想像の中にのみ描かれし我家、今は現實となりて予が一身を掩ひ圍みぬ、夢か夢にあらず、うつゝかうつゝにあらず、我足の勇ましく家の閾を踰ゆる時、予が口は最と爽かに響を放てり、『母上よ只今歸りぬ』と、此時庭にありし我母は、趨り倚て予を迎へ『オヽ遲かりしよ』と、此聲の響きに、三人の妹と一人の弟とは、躍り出でゝ喜ばしく予を迎へ、溢るゝ愛は四方より注ぎ來て豐かに予が袖に纒ひぬ、故らに勇ましかりし予が元氣も、今は只嬉しき涙に咽ぶあるのみ、斯かる間に、父は隣家より馳せ來り、茲に始めて渇したる、父母兄弟の笑顏に接し、一家團欒、愛の饗應に、更の移つるを知らざりし、翌朝に至れば、何時の間に聞き傳へけん、數多の兒童は、群然として予を見舞ひ來りぬ、彼等は皆十二分の敬意を表し、唯無言にして、羅漢の如く椽頭に並び坐せり、是皆今年六歲なる、予が少弟の友にして、予が弟の爲めに、大なる兄あるを賀するものに似たり、『オヽ可愛なる天國の子よ、爾等は皆賴もしき未來の英才なり、予は深く此の鳳雛を愛す』と、携へ歸れる革嚢を開き、採れる石版畵を賞すれば、彼等は皆、躍り喜び、犢の如くはね回つゝ、己の家に飛びぬ。アヽ破れたりと雖ども我家なる哉。造作未だ完からず、奥なる床の間、壁未だ成らず、夕陽は隣家の竹林を透り、直に來て破れたる我窻を見舞へり、何ぞ夫れ田舍の家の愉快なる、アヽ鄙びたりと雖ども我故鄕の人なるかな、東翁は瓜を摘んで我壯健の歸鄕を祝し、西婆は重を携へて我歸鄕の恙なきを喜び、些末なる一片の土產の爲めに、前隣後保交々來て泣くが如くに感謝の辭を洩らしぬ、何ぞ夫れ田舍の人の美麗なる、此故に予は深く田舍を愛して止まず、特に我故鄕なる田舍を愛して措くこと能はざるなり。

アヽ世の迷へる遊子よ何ぞ速かに去て爾の田舍に歸らざる、眞の人生を解せんと欲せば須く田舍に歸へれ、眞の人間を見むと欲せは須らく田舍に歸へれ、眞に友の心を知らんと欲せば速かに去て、爾の出でし故鄕に歸へれ、見よ我愛する友を見よ、彼は我久濶を謝せんとて、一瓶の葡萄酒を手にし、左もなつかし氣に、我廬を訪へり、此の如き黄金の露、我れ曾て口にせずと言へば、口にせざるが故に

持ち來るなりと答ふ、何ぞ其情の濃密なるや、斯くして夏の日の暑さと長さとは、談笑の間に忘れられたり、日西に沈んで月東に浮ぶ頃徐ろに前庭を出でゝ、稻葉の畔を逍遥すれは、村の一方に嘗り擾然として歌の聲す、是村民か夜を日に繼で雨を祈るの叫びなり、アヽ樸訥なる故鄕の人よ、祈る所は愚なりと雖ども、祈れる情や轉た悲し。

是箱底に得たる昨年の『歸鄕』なり、思へば今年も早や歸鄕の節となりぬ。歲華匆々、事意の如くならざるも、望鄕の念勃々として禁ずる能はず、去ざや歸らん我故鄕に、歸りて又今年も家庭の愛に浴せん、而して又今年の『歸鄕』を得ん。

史傳

熊澤蕃山（其四）

駒田信夫

○逸事一二

一日寺僧を享せんとて、器具其他の周旋は自らなし、專ら潔淸にと務めたりき。已にして顧て曰く、緇流、腥氣を惡む、吾家器皿、肉臭を帶ぶるを恐ると。即ち急に新器を調へて、賓禮を畢りぬ。其事に謹む、おほむねかくありき。

由井正雪は、武學を以て諸侯の間に知られけり。備前侯、之を召さんとて、蕃山に謀りければ、蕃山が曰く、臣先づ往て試むべしと。乃ち、正雪の家に往き、まみえて謂けるやう、寡君もし足下を聘せんとならば、足下來り仕ふべきか。正雪曰く、固より欲する所なり、而して其祿は如何。曰く、五千石、正雪曰く、敢て辭せんと。蕃山還て、侯に謂て曰く、正雪逆心、色にあらはる。一夫を得て國家を害するは、策に非ずと。後、正雪悟る所ありし如く、あゝ吾深裏、彼に洞視せられたりとて、懌びざりき。又之に類せる一話あり。蕃山某侯に至りしに、威儀特に秀て、骨格非常の人の座にありけるを見て、暫く注視したりけり。其人も亦蕃山に目を注ぎ、終に言を交へずして去りけり。蕃山乃ち侯に問て曰く、今の一士は仕官か、はた處士かと、侯曰く、彼は我か爲に兵書を講ず、處士由井正雪といふものなりと。蕃山色を正して曰く、余其相貌を熟知するに、また近くべきものにあらずと。他日正雪また來て侯に見えて曰く、また彼の如き士を近くるなかれと。正雪は後、果して亂をなしたりき。人々蕃山の慧眼に驚きけり。

○名聲赫々

万治元年は、なほ蕃山村にあり、時々召されて、藩政に與れり。池田輝祿より年々、米三百俵を送り來るを以て、父母妻子を養へり。二年藩主に請ひて、京師に遊び、遂に此に寓せり。公卿貴紳、其名を聞て、皆其門に集まれり。一條左府敎輔、久我内大臣廣道、中院大納言通茂、同通躬、野々宮中納言定縁、野々宮中將定基、清水谷大納言實業、押小路三位公起、久世中納言定清、油小路大納言隆貞、中御門大納言資照、伏原三位宣幸等、皆束修を行ひて至れり。自著集義外書の中にも、其敬禮されたりしさまを記せり。曰く、

予若かりし時、三公の職におはします人、愚が虛名を聞召て、めされき。饗膳ありしも少しも、とりつくろふ事なく、かろき朝夕の常と見えたり。其後こい茶出ぬ。予辭して次の間に立ち、暫くして入りたれば、其まゝ置て飮人なし、闕内侯のれき〳〵ありしかども、皆々予に讓りたまひき。其間に闕内侯の來て、かへり給へども、次の間までもおくりたまはず、予が歸る時は、玄關までおくりたまひ、下に居て禮したまへり。名をよびたまふにも、殿をつけたまへり。此人さのみ道德をしりたまはざりしかども、士の本を辨へ、且、時の義を知りたまへばなり云々。

蕃山亦、樂を好み琵琶を小倉大納言實起に學び、濵庇と名くる琵琶を愛翫し後世に傳はれり箏を藪大納言嗣孝に學べり。一日微行して、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

越天樂の笛を奏せしに、笛の名家、安倍飛騨、其音を聞て嘆賞して曰く、憶ふに凡庸の人にあらず、其聲洋々乎として、心情の正に發すといひき。又釋元政と交り深く、屢就て佛書の疑義を質し、又國典に志し、源氏物語などをも元政に就て聞けり。嘗て此書を說きしに、中院通茂聞て、其溫を得たるを稱しき。かくて元政も亦蕃山の人材に服し、此の如き人を得て、共に浮圖の弊を救はゞやと思ひ、或時歎じて曰く、今の世僧侶甚だ無狀なり、釋迦の罪人たるを免れずと。蕃山曰く、何ぞ獨り僧侶のみならんや、孔子をして今の儒者を見せしめば、之を何といはん、歎すべき至りなりと。

一たび仕を辭してより、また官海に浮ぶ心なく、或人問ても し列國の君祿を授けて、臣たらしむるとあらば、先生往かんかといひし時に、答て曰く、余にして列國に遊事して、糊口する者なれば、召に應じてゆくも可なり。然れども已に致仕せり、又人臣たるべからず。苟も我と舊あるにあらざれば、敢て妄に諸侯の養を受けず。万一公方周郞の志ありて、召すに道を以てしたまふ事あらば、乃ち深山にかくれ、野人となん。公方なほ我を臣とすること能はず、况や諸侯をやと。以て其志を知るべし。

○閑居の身 附佛徒に對する見

聲名、已に一世に重く、名公鉅卿、皆之を尊信禮遇したりしが、從て誹謗も亦漸く起り、京兆尹、牧野親成等、讒者の言を信じて大に之を惡めり。終に京師に居る事能はずして、寬文七年、丁未四十九歲にて、芳野に退きぬ。京師にあること殆と十年なりき。

寬文七未年さはる事ありて、吉野の山深くすみ侍る頃。

この春は吉野の山のやま人と

なりてこそしれ花の色香を

同じ中の年閑居にて

傳へ來て春は神代にかはらぬを

人の心ぞ昔にも似ぬ

おなし江にねふるかもめの心をも

知らて千鳥のたちゐなくらん

雪霜の下より匂ふ梅の花

春またぬ身そうらやまれぬる

寒中の梅花、雪霜にも色香のかはらざるを手折りて

今ぞしる歲にもあらぬ梅か枝を

折りて首陽の人のこゝろを

已にしに又、去て山城の鹿背山に寓居せり。或時客あり、問て曰く、先生此頃閒ありや、答て曰く、吾、善をなすに急にして、日もこれ足らず、何の閒かあらん、人苟も志を義に立つれは、盥嗽櫛縱も善に進むが爲にす、もし然らずば、たとへ覇業をなすとも、兒戲に過ぎざるのみと。此頃ろ酒井雅樂頭忠世、板倉內膳正重矩、松平日向寺信之等、蕃山を尊信する事厚く、九年には日向守信之の招に應じて、其封內播州明石の城近き、大山寺の邊に寓し、其居を名けて、息遊軒といへり。是より安に其廬を出ず、筆硯を友として日を送りぬ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

見る人の心からこそ山さとの
うき世の外の月はすむらめ

隣寺の僧、蕃山がかつて備藩に執政となり、專ら佛徒を排擊せしと聞き、往て面折せんとて、其門を訪ひぬ。談、數時にして出て丶曰く、あ丶此の如き人、豈我佛門に仇せんやとて、敬服したりしとぞ。世に、備前の佛寺を廢し、淫祠を毀ちなとしたるを以て、蕃山のなす所ろと傳へけれども、實は然らず。此擧は蕃山致仕して、數年後の事なりき。光政公は深く、當時僧侶の驕奢不律を憤り、之を除かんとなせり。然れども蕃山の居る間は、憚りて敢て口せざりき。蕃山は之を知りて、時に諷諫し退て歎じて曰く、一國の佛を除くは易けれども、天下の佛を如何せん。今之を除きて、たとひ一たびは熄する事ありても、又再燃せば其弊は今日に十倍せん。寧ろ除かざるに若かずと。致仕の後、備藩に廢寺の擧ありと聞き、上書して諫めたる程なりき。然るに其著書に、大に佛敎の弊を論じたるを以て、人皆蕃山を以て、排佛の主動者となせり。蕃山の度量は、此の如きものにあらず、或時人あり問て曰く、先生、他日志を得ば、全く佛を排除せんかと。答て曰く、否、有道の君、位にありて政を行へば、天下各其處を得、佛もまた其舊に復せんのみ。今や佛氏甚だ熾なるに似て、實は甚だ衰頽せり。夫、吾道は王道なり、王道は大道なり、佛は小道なり、小道は旁徑曲路のみ、異端は川流、吾道は大海なり、皆受けて辭せず、何ぞ拒む事あらんと。其見る處大に異なり。

時報

◎學校、敎育

○彦根女學校の近況　同校は本科と裁縫科とありて本科は普通科と高等科に分れ普通科は四年即四學級に高等科は二年即二學級に裁縫科は六年即六學級に編制せらる普通科は高等小學校の學科程度と粗同一なり而して裁縫科は修身禮式家政音樂裁縫科の諸科を必須とし他學科を隨意科とす客年十月より研究生なるものを設け卒業生にして卒業後尚ほ在學志願の者に既習學科を一層深く研究せしめ併せて諸學科の應用法敎授法諸帳簿の記入等を練習するとの便宜法を與ふる由目下在籍生徒は高等科五名普通科百七十五名裁縫科六十名合計二百四十名なりと（同校同窓會報告に據る）

○倚松園女塾の開塾式　園輝子の設置になる同塾は去る十五日開塾式を擧げたり吳大五郎澁澤榮一美山貫一諸子の演說あり來賓中には土方大越(領事)濱尾等の各夫人もありたりと

○玉の浦女學校　原口令成氏校主となりて長崎市引地町三十三番戶に於て不日開校せんとする同校は北原雅長氏等數十名の贊成を得敎員諸子都て熱心の篤志家のみなりと云へば前途頗て好望なるべく特に相當の女學校なき同地のとなれば就學者の便宜大なるべし去る日校主原口氏は設置趣意書を發して廣く同志の贊助を求めたり

◎衷誠、美談

○婦人從軍歌　左は菊間義清の作になり華族女學校音樂敎授奧好義の作曲なり

一

火筒の響き遠ざかる　跡には虫もこゑたてず
吹立つ風はなまぐさく　くれなゐ深し草の色

二

わきてすごきは敵味方　帽子飛び去り袖ちぎれ
斃れし人の顏色は　野邊の草葉に髣髴

三

やがて十字の旗をたて　天幕をさして荷ひゆく
此人々は日の本の　仁と愛とに富む夫人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

四

眞白に細き手をのべて　流るゝ血しほ洗ひ去り
まくや繃帶白妙の　衣の袖はあけにそみ

五

味方の兵の上のみか　言も通はぬあだ迄も
いされんごろに看護する　心の色は赤十字

六

あないさましや文明の　母さいふ名をおひ持ちて
いされんごろに看護する　心のいろは赤十字

○婦人慈善會の現況　婦人慈善會なるものは今度征清軍の出師あるや第五師團長野津中將の婦人始め各將校の夫人幷に廣島縣知事鍋島氏關書記官廣島病院長等の夫人妻女の主唱設立したるものにて專ら兵士の創痍を看護する爲めなれば爾來數々看護上に關する練習を爲し居りしさ目今に至りては既に繃帶位は自由に爲し得るに至り現に成歡驛の際負傷せし兵士の看護に從事し居れりさ

○函館婦人會　同會員は今回日清交戰に就き軍資金を獻納せんさて過般來種々計畫中なりしが今回愈々其計畫成り會員諸氏が製作にかゝるシャツ、靴下、肩掛、小供帽子足袋等を去る十六日函館女學校内に於いて販賣したり其收入金は其筋へ獻納する由

○福岡婦人協同會　福岡義勇團の成るや直ちに入團を申込みたる婦人數十名ありしが婦人の團員は重に渡韓して看護の役に服するの决心にて爾來は日々福岡病院に通ひ看護術及び繃帶法等を研究しつゝあるも看護婦さして渡韓の事は容易にこれを許さゞるより茲に婦人協同會なるものを組織し會場はこれを福岡賀子町に設けて會員日々出席し繃帶法等の研究を爲す傍はら寄附金を募りて資本を作り思ひ〳〵の手職を爲してこれを金に代え在韓軍隊の慰勞費に献納するとになり去る十九日より會場に於て菓子類を賣り始めたりさ云ふ、協同會員は左の諸婦なりさ辰巳トモ、安西タツ、三浦トモ、野村セイ、廣瀨シヅ、米澤タキ、葉山シゲ、宮川ウツチ、吉田トク(以上は渡韓志望)伊藤トリ、内野トト、今井クマ、光安某、本田ハル、木山スエ、澤村某、大村某

○特志看護婦會　赤十字特志看護婦人會に於て過般陸軍恤兵部へ消毒繃帶一万二千を寄贈するこさに定められたるに就ては各御息所各夫人方一同非常の奮發にて日々十八乃至二十人づゝの交代にて赤十字病院の消毒室に出張あり普通看護婦さ同樣の消毒服を着けられて熱心にガーゼの消毒卷直に從事せられ其の出來上り高平均一日五百本を下らず既に七千本餘を作られたりさ云ふ右に付き陸軍省及び佐野赤十字社長は重れでも見難き其の實狀を撮影し永く紀念に殘し置き度しさて去る十五日には戸田伯が同病院に出張し自から器械を据えて二枚續に撮影せられし由當日御出張の方々には小松兩宮、華頂宮の各御息所殿下を始め奉りて毛利公爵夫人、大山西鄕戸田の各伯爵夫人、樺山、仁禮の各子夫人、足立軍醫監、新山監督の各夫人等二十三名なりしさぞ

○奇特の婦女子　三重縣員辨郡山鄕村大字麻生田の婦女子は過日集會を催ほし决議の上三日間女子總出にて員辨川礦に於て石灰石を拾ひ之を販賣して金十餘圓を得、軍資金へ献納せり

○奇特の老婦人　群馬縣多胡郡多胡村大字東谷村酒井萬平の母こさ(六十二年)は資姓貞淑誠實を以て聞へたる老嫗なるが家には亡夫忠平さの間に男子三人あり長男伊作は明治十九年陸軍教導團に入りしも不幸にして修學中病死し二男萬平家督を相續したれど身躰羸弱にて徵兵檢査に合格せず三男周彌は本年徵兵適齡なりしも是又不合格にて三人の男子中一人も國家の用に立たざるを深く憂慮せしが今回日清交戰の事起るや國恩萬分の一を報ずるは此時なりさて所有の山林を賣却し其金を陸軍々資金の内へ五十圓、海軍省へ五十圓併せて一百圓を當主萬平の名義を以て献金願出たりさぞ聞く所によれば全家さて左のみ資產も多からず僅に地租額十二三圓位を納むる身なりさ云ふ(上毛新聞)

○赤十字社看護婦の出發　赤十字社は曩に在韓の病兵看護の爲め朝鮮及び廣島に看護員を派遣せしが在韓の病兵負傷者等は成る可く廣島に歸來せしむるを以て同社は尙去る十六日第三回の看護員を廣島に派遣し患者用の寢衣醫療器械消毒材料調藥器械藥品等の諸用具を輸送せり其の派遣人員は醫長心得小川善、醫員山上兼輔助手醫員年田本三、島田吉俊、立川方飴調劑員内海廣業、助手調劑員川上輝治の諸氏及び看護婦取締仁禮子爵夫人看護婦三十名、書記狄野忍、會計員西洋平、使丁一名合計四十一名なり

○橫濵婦人恤兵會　の起りしこさは既に前號本紙上に記せしが同會は去る十七日より義捐金を募集したるに原善三郎氏の夫人幸子、大谷嘉兵衛氏の夫人榮子、渡邊福三郎氏の夫人多滿子、箕田長次郎氏の未亡人家壽子各金一百圓宛を始め園田孝吉氏の夫人ケイ子金五十圓、原八重子金五十圓、原安子廿五圓、箕田勝子金十圓、箕田長子五圓其他二圓乃廿錢迄數十名にて同日〆切迄合計六百十圓三十錢なりさ云ふ

○貴夫人の贈品に對する相浦司令長官の謝辭　皇太后陛下の懿旨並に各宮妃殿下の思召を躰し遠征慰問の爲め貴夫人より海軍々人へ寄贈したるハンカチーフは相浦西海艦隊司令長官より各艦へ配布せし由にて本月一日附を以て左記謝狀を寄贈婦人總代毛利公爵夫人宛にて贈り越したりさいふ

木綿縮ハンカチーフ今般遠征慰問さして前書の品御寄贈に與り客月三十一日拜受早速麾下各艦へ配布の上

皇太后陛下優渥の懿旨並に各宮妃殿下召の程披露致候處深く御厚志に感じ辱く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

受納仕候右一同に代り謝辭を申述ぶる如斯に候敬白

○貞婦茶谷たけ子　大坂市南區高津町三番町茶谷駒吉の妻たけ女は資性温良夫に事へて貞、嫁後日ならずして夫不治の病症に罹り家益す貧しきに陷るも之が爲め嘗て其療養を怠らず晝は機杼澣濯の勞を執り以て湯藥の資に供し夜は病褥に侍し看護懇到其志操の變らざる十年一日の如し洵に奇特なりとて同府廳より金五圓を下賜されたり

○母の忠肝其の子を勵ます　日本橋區蠣殻町三丁目四番地多宮みれ方に同居せる關本忠藏(廿五年)は第一師團の豫備歩兵にして今度召集に應じたるが同人は平常父母に孝順の心篤く其の出發前は神田佐久間町一丁目網舟業村松銀藏の舟子となり已れが冗費を省きて給金の內より月々四圓を親の手許に贈りて家計を助けたり兩親は本所林町一丁目八番地岡崎かよ方に同居し母のいせは雇人口入の手引などして月々僅かに一圓五十錢を得る位なれば忠藏が送金を賴りに生活を營めども貧しき上の事とて諸道具は家主のかよに屬するを使用せり扨て父の竹次郞と云は十三年以前より不眠病に罹り今は身躰漸々衰弱し起居さへ心の儘にならず其困難一方ならざれば姉のてつは洲崎甲子樓に辛き娼妓の勤めをなし弟由藏は神奈川縣三浦郡浦の鄉大濵某方に年季奉公の身となれり斯る極貧の中より今度忠藏が召集せられたれば蠶の手もがれたる感あるべきに殊勝にも母のいせは目に見ゆる家事の困難を物とも思はず忠藏に對し軍人の職分を誤らざる樣深く誡め且交戰の際は勇進奮鬪軍人の龜鑑となり萬一にも敵の爲め捕はるゝが如き不幸に遇はゞ帝國の恥辱ともなりぬべければ其の時こそは潔く自殺して死にもせよと豫て所持せし一振の短刀を與へければ忠藏は此の言に激厲して勇み出發したりとなんとても身貧にして心貧ならすとは此人をこそ云ふべけれ(國會)

◎風　紀

○東京風俗の一斑　左は都新聞の報する所なるか或る筋にて取調べたるものなりと云ふ一讀して落涙袖を濕ほす

▲府下二廓四宿(新轄三多摩郡三宿場を除く)の貸坐敷は五百四十六戸娼妓は四千八百〇八人引手茶屋は百五十九戸にして本年一月一日より六月三十一日に至るまでの客人は九十三万九千三百三十一人其の遣ひし金は四十五万三千四百六十八圓四十五錢五厘

▲又府下十五區六郡に於ける藝妓の員數は二千五百九十七人內十六歲未滿の小藝妓四百五十六人

▲又料理店は千八百四十一戸待合茶屋は千五百〇七戸にして廿一年警察令に依て屆出での酌女給仕女の總數九千五百二十三人

▲明治廿一年七月(三島總監時代)取調べたる時の十五區六郡に於けるは藝妓千八百七十三人料理茶屋千百零六戸待合茶屋四百二十八戸給仕酌女合せて二千四百六十五人

藝妓待合茶屋曖昧料理茶屋は僅々五六年の間に右の如く增加したるがこれに反して貸座敷引手茶屋は一割一分强を減じ娼妓は二割六分を減じたり此の外廿一年より本年に至るまでの比較に依れば矢場遊戲場は三分の一以上を減じ銘酒屋は殆んど五倍を增加したりといふ蓋し其の原因は矢場及び他の遊戲場は取締嚴重なるも銘酒屋の如きは頗る緩なるがため彼れの嚴なる方に束縛せられて苦しまんよりは此れの緩なる方に在りて娼業を營なまむに若くはなしと扨は銘酒屋の增加するなりとぞ

▲府下十五警察署に於て本年一月より六月三十日に至るまで密賣淫の處分を受けたるもの五百八十二人內男三十六人女百四十六人女の拘留日數七百三十日科料金八十六圓五十錢

▲又十五區內に於ける密賣淫者と思量する婦女は九千八百六十名(但し藝妓、茶屋女は別口とす)これを大別して甲乙の二種とす(甲種)女義太夫◉英語夜學◉月琴の師匠◉花の師匠女學生の下宿と稱するもの◉外妾と稱するもの◉針仕事の教授と稱するもの◉非職官吏長煩ひのため內職と稱するもの(乙種)桂庵◉一夜目見◉女按摩◉銘酒屋汁粉屋◉すゝぎ洗濯◉此外直か引き即ち引ばり夜鷹の類右のものどもの重なる巣は第一が神田區第二が京橋區第三が芝區第四が赤坂區第五が日本橋區なりとぞ又本年一月より六月に至るまでの花札の製造高を聞くに左の如し但し上方屋其他專門賣店に於ける數のみなり六十四万四千五百組

▲結婚と離婚　府下に於ける去る七月中の結婚と離婚の數は此程の調査によるに結婚五百二十八人前月より減ずると八十一人離婚百四十八人前月より減ずると四十八人なりと云ふ

▲風俗壞亂にて演劇の停止　淺草區七軒町なる劇場福榮座は源氏節にて女俳優の興行なるが脚本の不許可をも顧みず切られお富の狂言にて不認可の脚本を其儘演じ居たるが風俗壞亂の故を以て去る日營業を停止されたり

○莊內新報の女學生(小說)　に就て兩羽新聞は左の如き言をなせり皮肉に過ぐ。女學生なる小說は莊內新報に依つて吾人に紹介せられたり文字の拙劣なる趣向の卑陋なるには驚き入つて候なり釉の浦人なるものはいづれの馬骨なるや之れを知るの要なきも文學界の一蛆虫としても尤も惡むべき腐敗一分子ならざるを得ず正明先生の文學に迂なるは人の知る所なれど狂花先生と云へる立派な自稱文學者が莊內新報編輯長として威張らるゝ以上は女學生なる陋文字に小說なる名字を附して揭ぐる事の出來ぬ筈なるに何夢見給ひてや字々文をなさゞるものをとつて我莊內文學界の耻の上塗をなして得意然たり記者些とたしなみ給ひてよ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●講習生募集

當校小學唱歌講習科へ女子十五名無試驗にて入學を許す小學校教員免許狀を有するものにして志願の者は本月三十日限り願出べし

明治廿七年九月

上野公園内 高等師範學校附屬 音樂學校

職人盡し 七十一番歌合

繪入。改良半紙刷。紙數百八十六頁。和裝

定價 金廿五錢 郵稅 金四錢

此書の編者詳かならざれども世に歷史上考證として諸書に引用さるゝ處なり、其原品は繪卷物として故實家の秘匣に藏し未だ世に普及せず、當時民間七十一種の職業を書き月と戀とを題として各種二首づゝの歌を詠し之に判の詞を加へたる者なり、即ち殆んど當時の職業を網羅したる者にして、其圖と云ひ其の詞と云ひ足利時代の風俗を觀るべき一大珍書なれば、歷史に志す人に非るも歷史上の參考として各人一本を座右に置くべきものなり、

發兌 東京京橋區彌左衛門町 合名會社 經濟雜誌社

賣捌 ●東京。丸善、小林、東京堂、巖々堂●大坂。岡島、梅原●京都。大黑屋●橫濱。丸善●其他書肆

●筆のゆきかひ 全二冊

東京華族女學校學監下田歌子先生序
全 囑托教授關根正直先生編輯
全 教授坂正臣先生編輯幷書

一冊正價金廿八錢 郵稅金六錢宛

●年中總菜の仕方 花の家胡蝶大人著（第拾版）實價金廿五錢 郵稅金六錢

●日本女禮式 坪谷善四郎君著 閨秀錦囊（密畫入）（第四版）全 正價五拾錢 郵稅拾貳錢

●家政整理法 坪谷善四郎君著（第七版）全 正價拾五錢 郵稅八錢

●家事經濟書 飯島半十郎君著 全 正價拾貳錢 郵稅四錢

●明治姬鏡 文學士濱田健次郎先生校閱 婦女教育 濱本顯義君著 全 正價五拾錢 郵稅八錢

●婦女性理一代鑑 陸軍々醫總監松本順君題辭 堀誠太郎君譯（第三版）全 正價三拾錢 郵稅拾錢

●小兒養育法 醫學士中村正道君著 全 正價拾錢 郵稅四錢

●婦女手藝法 須永金三郎君著（密圖入）（第三版）全 正價拾五錢 郵稅六錢

●通俗看病法 第三高等中學校教授 醫學士高橋金一郎君著 全 正價拾五錢 郵稅六錢

●衛生美身術 刈城森種太郎君著 全 正價拾錢 郵稅四錢

賣捌所 東京神田表神保町六番地 女學雜誌社書店

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

新撰 **大日本全圖** 附海陸道郡界電信燈臺光達鐵道里程 正價金二拾錢 郵税四錢

新撰明確 **日清韓三國圖** 附北京京城大同江口威海衛等ノ要圖 正價金拾錢 郵税金二錢

八道色分 **朝鮮國明細全圖** 幷附近航海線路 定價金八錢 郵税金二錢

日清戰爭實記 毎編寫眞銅版畵入 毎月三回 一冊金八錢 郵税金壹錢五厘 但シ第一卷ハ金四錢

足立栗園編著 **朝鮮志** 全 正價金拾錢 郵税金二錢

如囚居士著 **朝鮮雜記** 全 正價金拾八錢 郵税金四錢

日清韓 **新三國志** 朝鮮、支那諸名士詳傳並肖像挿入 全 正價金拾五錢 郵税金四錢

山口昜譯述 **朝鮮懲毖錄** 特命全權公使從三位大島圭介君校閲、鈴木信仁君編著 全 正價金廿五錢 郵税金四錢

朝鮮洪奭鉉君著 **朝鮮紀聞** 全 正價金廿五錢 郵税金六錢

新撰朝鮮會話 全 正價金八錢 郵税金二錢

佐々木信綱君作 **支那征伐の歌** 全 正價金七錢 郵税金二錢

賣捌所 **女學雜誌社書店**

評論第貳拾八號要目

朝鮮開革案 政閣。經濟及び兵備警察。教育。後藤伯。蒼海老伯の五章に分ちて、朝鮮の開革に係はる吾黨の所考を發表す。知友、冀はくは、一顧を垂よ。

朝鮮の傳道 日本人の海外傳道大ひに興らざる可らず。此の傳道先づ朝鮮に着手せざる可らず。而して朝鮮傳道の方案抑そも何如ん。茲に則はち吾黨の所見を述ぶ。

はつ秋のたより 何等、幽玄。何等、風流。何等、凄寂。何等、獨吟。此の文、多恨の才子が初秋の感慨を露はす。

あまごひ 老俠の人、赤誠を獻げて、天これに感道す。小説の如くして、小説にあらず。たゞ輕淺の人に於て即はち小説たらん耳。

日英新條約を讀む 短文、少語、然れども方今の時論に一の益する所ろなからずや。吾黨時事の所見、不幸にして興情と異なるもの多し。

女學雜誌前號要目

朝鮮よりの來信 是れ朝鮮新報社青山好惠氏の寄する所、彼地に於ける篤志看護婦奮つて起つに至りたる顛末を細録し、實況眼前にあり。此の美事、尤とも慶すべし、此の佳報尤とも注目す可し。

ことしの秋 こさしの秋のさびしさを叙して、無限の感慨をもらすは、此社説中の第一篇なり。此外、新條約實施後の宗教及び教育に對して豫想するの一篇あり。又、覺悟の教を説く有力の一篇あり。

吉田松陰の女教 吉田松陰、山鹿甚五左衛門を追慕して禁ぜず、其の武教全書を講じて松下塾の書生に訓す。茲に其の女教に關するものを見れば、松陰が當年の論調現然としてあり、慨々乎としてあり。

高橋傳五郎の絶筆 これ、千島シヤシコタンに殉死したる青年傳道者絶筆の一書、師父押川方義に寄せんとして豫かじめ認ため遺したる所のもの也。謙にして和、鬱勃として潔、彼が生平の所養を顯はして有餘。

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰) 前金十錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引
○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價に引て引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部注文を要し以上半部増さ定む。

本誌代價

冊數	定價前金	市外定價郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

發賣所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

發行所 東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷(電話十九番)

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY